

みんな元氣ですお母さん

葉山町支部 鈴木 マサ（子）

戦没者 鈴木 繁治

戦没地 フイリピン

春蘭漫にして桜花咲き乱れる昭和十九年、遂にくるべき召集令状が父のもとに届きました。母も時節柄覚悟はしておりましたが、生爪を剥がされるように父は歓呼の声に送られて戦場に出立しました。その時私は小学二年生、妹達は五歳と一歳、父と生活が長かった為に私には思い出も多かったです。妹達には臆げ、ましてや末の妹は顔さえも知らず、又思い出もないままに父と別れる事になりました。何の為の旅立ちか知らぬ妹達は父の懷に抱かれておりませんが、父はこれがこの子達との今生の別れ、そして、我亡き後の母娘達の生活、その思いだけが父の胸中を駆け巡っていた事と思います。

それから暫くした或る日、母は私達を連れて千葉の我孫子連隊の父を尋ねる事となりました。言わずと知れた最後の面会、母は既に察知していた事と思います。前夜から父の大好きな饅頭を作っていました。物のない時代故、上等なものではありませんが、妻が夫に捧げる別れの盃ならぬ別れの饅頭、父は一歳の末妹をあぐらの中に抱きかかえ、子は父に頬ずりしながら愛しんでお

りました。やがて、日も西に傾き定められた面会時間も束の間に過ぎ、父は私の頭を撫でながら「母ちゃんの言う事をよく聞いて、妹達の面倒をみるんだよ」と最後の望みを託されました。衛門まで見送りにきた父は私達が見えなくなる迄手を振り、私達は振り返り振り返り別れを惜しみました。

やがて苛烈を極めた戦争も終焉を迎え多くの兵隊さん達の復員状況がラジオ、新聞で報道されるようになりました。いつ帰って来るかと、私達家族は大きな期待を持ち続け待つこと一年、父は昭和二十年二月二十四日フィリピン・コレヒドール島、マリンタトンネル内に於いて自爆玉碎したとの戦死公報が入ってきました。張りつめていた気持ちは一辺に吹き飛び母は泣き続けました。つられて私達も母の膝に縋って泣きあかした事を忘れません。

一家の大黒柱を失った私達の生活は惨なものでした。僅かのたくわえはまたたく間に底をつく始末、食卓にあがるものといえばさつまのふかし芋、それにお粥、どうやらこうやらの生活で飢えを凌いでおりました。

やがて私は中学を卒業しました。一家の為に就職試験を受けました。しかし、当時の社会では「父無し子」は採用してくれません。母も私もまさに奈落の底に突き落とされた思いでした。それから母は近所の農家へ日雇いとしてお手伝いに出かけるようになりました。私は暫く家事を手伝う事となりましたが、渡る世間は鬼ばかりではなかった。ご近所の奥様のところで住み込みで働くようになりました。初めていただいたささやかなお給金、まず母に手渡すと、母は亡き父の

仏壇に捧げました。「お父さん、マサが働いてくれました」と言い乍ら大粒の涙を流していました。

歳月は流れ妹達もようやく働く身となり、そして結婚にこぎつける事が出来ました。母もやつと責任を果たし、やれやれと思つた矢先四十八歳の若さで脳出血に倒れ半身不随となつてしまいました。しかし、けんめいなりハビリで不自由ながら歩行が出来るようになりましたが、それも束の間、六十三歳にして家族に見守られながら来世へ旅立っていききました。神の恵みの薄かった母、ひたすら苦勞しに此の世に生れてきたような母、そんな母が哀れでなりません。「でもお母さん娘達三人、仲良く暮らしていますよ。安心して」